



音楽祭の最後をかざったアーティスト全員によるセッション
観客と一緒に『ちんぐソング』を歌い盛り上がりました。

対馬ちんぐ音楽祭

2006

日韓のアーティスト競演に熱気。過去最高の2200人が来場！

世界の共通言語である音楽を通して日韓両国の友好を深めようと、毎年8月下旬に開かれている「対馬ちんぐ音楽祭」が、今年も8月26日、美津島町の対馬グリーンパーク芝生広場で開催され、日韓のアーティストによる華やかな舞台が繰り広げられました。

7組のアーティストが熱演
11回目の開催となった今年、日本からは小室等、森山良子、D-51、そしてメンバーの2人が対馬出身者のHICLED ASS、アマチュアバンドのペップサンズの計5組、韓国からはW(ダブリュー)、ラプホリックの実力派バンド2組が出演。海をバツクに設けられた特設ステージからは日本語、韓国語の歌声が心地よく響き渡りました。

過去最高の観客で賑わう
開場は午後3時40分。受付には開場の前からお客さんが数多く詰めかけていました。

音楽祭は、夏の日差しが残る午後4時、ペップサンズの演奏で始まりしました。日が落ち、辺りが暗くなつてゆくに連れて観客も増え、最終的には過去最高となる2200人



会場には多くの観客が詰めかけました

が来場。芝生広場を埋め尽くしました。
盛り上がったステージ
アーティストたちによる舞台の中でも若者に人気のD-51によるステージは、ノリの良いリズムの歌に合わせ観客が総立ちになって声援を送るなどとても盛り上がりました。
また、音楽祭初出場の森山



ステージの最初を飾ったペップサンズ

良子さんは、「涙そうそう」「さとうきび畑」などのヒット曲を持ち前の歌唱力で歌い上げ、観客を魅了しました。
ステージの最後は出演者全員で、ちんぐ音楽祭で生まれた「ちんぐソング」を観客と一緒に合唱。会場が一体感に包まれながら音楽祭の最後を締めくくりました。



小室等さん 音楽祭には初回から出演し、もはや欠かせない存在。「国同士が仲良くできる可能性を対馬がこのコンサートを通して行っていることに敬意を持っている。対馬のみなさんありがとう」と話していました。

森山良子さん デビュー曲「この広い野原いっぱい」をはじめヒット曲を熱唱。対馬は涼しいですねと話していました。小室さんとはアマチュア時代からのお友達だそうです。



ラブホリック 音楽祭には2回目の出演。「海外公演だと緊張するが、リラックスして歌えた。1回だけではさみしいので1日2回公演にして」と提案。



D-51 TVドラマの主題歌になった「NO MORE CRY」等を披露。観客も総立ちで声援。沖縄出身の2人は、「対馬はすごく沖縄に似ていてびっくりした。初めて来た感じがしない」と感激の様子でした。



Hi-CLASS メンバーの糸瀬隆一さんと宮原清竹きよたけさんは、共に上対馬町出身で上対馬高校の卒業生。初めての出演となったちんぐ音楽祭の舞台上で「帰ってこれて嬉しい。この音楽祭に出られたことが今できる最高の親孝行。さらにでっかくなって帰ってきます」と宣言しました。地元出身アーティストの今後の活躍に期待し、みんなで応援しましょう！

W(ダブルユー) 韓国のエレクトロニックバンド。音楽祭初参加。レベルの高い演奏を披露しました。



Hi-CLASS メンバー紹介(左から)「慎典みつのり」こと宮原慎典さん(ドラム)、「清竹きよたけ」こと宮原清竹さん(ボーカル&ギター)、「ゆーじ」こと中村祐司さん(ベース)、リーダーで「マッチョ」こと糸瀬隆一さん(ギター)

Hi-CLASS プロフィール

99年東京で結成。2000年現在のメンバーになり2004年より活動の拠点を横浜に移し初ワンマンライブを12月に成功させ、横浜インディーズ会で頭角を表す。

今年4月、自身初のマキシシングル「赤い金魚」を発表し初の全国ツアーを成功させる。11月には初のホールコンサートを横浜市鶴見会館にて行う予定。今最も横浜インディーズシーンで期待されるアーティスト。

一日救急隊長・指令室長を委嘱し
模擬救急出場訓練
対馬市消防本部



けが人の救助を行う救急隊員



一日救急隊長として活躍した
井野貴之さん

9月12日、救急医療週間（9月6～12日）に合わせ救急業務の実態と救急医療への感心を持ってもらおうと対馬市消防本部が、救急車の模擬救急出場訓練を実施しました。訓練には一日救急隊長として鈴木石油（株）の井野貴之さん（41歳）が、救急隊員と一緒に救急車に乗り込み、けが人の救出、病院への搬送など救急業務を体験。また、消防署に職場体験学習にきていた諫早養護学校高等部2年の初村利己さん（17歳・厳原町久根田舎出身）が一日指令室長として救急車や病院との通信業務を行いました。

井野さんは「貴重な体験をして非常に為になりました。色んな人に経験してもらいたいです」と話していました。増える救急出場件数
平成17年中、対馬市の救急出場件数は1491件（前年比72件増）で、一日平均約4件です。
搬送人員は1372人（前年比96人増）で、うち65歳以上の高齢者の占める割合は57・4%でした。
事故種別では全搬送人員の69%が「急病」で、うち65歳以上の高齢者の割合が58・1%でした。

しまの活性化を担う観光のプロを育成
しま自慢観光カレッジが開校



講義を行う養父信夫さん

しまの活性化を担う観光の先導役を育成し、観光分野の活性化と雇用の創出を目的とした平成18年度対馬地区「しま自慢観光カレッジ」が9月2日、美津島文化会館で開校し、市内から39名の受講生が集まりました。

このカレッジは、県下の離島、県、県観光連盟等で構成する「ながさきしま自慢」観光人材育成協議会が主催したもので受講料は無料。内閣総理大臣認定の「地域再生計画」3ヶ年事業として昨年から実施されています。
全国的に活躍する観光のプロ

口を講師に招き、観光ガイド、商品開発クリエイターなどの4分野で講座や実践訓練が行われ、計7～8回の受講後には県認定の修了証書が交付されます。

午前10時から始まった第1回目の講座には、田舎に生きる人々の暮らしを情報発信している雑誌「九州のムラ」編集長の養父信夫さんを講師に招き、体験型観光を利用した地域活性化の方法について講義が行われました。

変化している観光形態
グリーンツーリズムの需要増加
講義の中で養父さんは、現



真剣な表情で講義に耳を傾ける受講生たち

在は、都市住民が豊かな自然や美しい景観を求めて田舎の村を訪れ、交流や体験を通して余暇を楽しむグリーンツーリズムの需要が増えてきている。地域の風景や風習、歴史人が観光客を呼び込む資源になる」と説明。そして、「対馬でもやる気のある人達で組織を作り、体験型観光づくりに取り組んでいってほしい」と呼び掛けました。

また、午後からは第2回目の講座として「NPO法人がまだすネット」事務局長の相良淳郎さんが講演。島原半島で農林漁業体験を観光に結びつけ、交流人口拡大に向けて活動を続けている実体験を話し、受講生達は真剣な表情で耳を傾けていました。

教頭先生にすすめられて参加したという豊玉高校3年生御手洗京祐くん（18歳・豊玉町糸瀬）は、「将来は対馬で観光に携わる仕事をしたい」と思っている。このカレッジで学んだ事を今後活かしたい」と話していました。
カレッジは12月までに終了する予定です。